
恋愛スターダスト

富良野白熊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛スターダスト

【Nコード】

N9508J

【作者名】

富良野白熊

【あらすじ】

幻の奇病と呼ばれる『星屑症候群』の発症者である“僕”が、星を愛する病弱な“彼女”と出逢い恋をした。

一年間という短い時間の中で、“僕”は何を見て何を感じたのか。

少女は、真実を知るために“彼”と共に始めた日記を開く……。

第1話 星が、踊る。

4月・・・。

高校二年に進級した日の夜、桜の花弁が舞い散るあの丘で“僕”と

“彼女”は出逢った。

彼女は天体望遠鏡で星を見ていた。

僕にとって忌むべき存在である星を、彼女はあろうことか望遠鏡で眺めているのだ。

「星なんか見て楽しいですか？」

普段馴れ合いを好まない僕だが、何故か今日に限って名も知らぬ彼女に声を掛けていた。

今思えば、僕はこの時すでに彼女に惹かれていたんだと思う。

彼女は望遠鏡を覗きながら、静かに応えた。

「私の空っぽな人生に華を添える趣味よ。

・・・何か文句でも？」

僕は人よりも感情が稀薄だと自覚はしていたが、もしかしたらこの女は僕よりも冷たい人間なんじゃないかと感じた。

「貴方こそ、何故空を見ようとししないの？こんなに美しいのに・・・」

「僕にとって、この夜空は忌まわしい毒に他ならない。何故星が輝いているか知ってるかい？この星たちは僕の命を喰らおうとしているんだ。」

思わず熱弁していた僕を、彼女が口調と同じく冷ややかな目で見ていた。

近くに寄って話していたため、図らずもお互いの顔の距離はかなり近いものとなっていた。

それこそ彼女の吐息が僕まで届くほどに。

そして、僕は言葉を失った。

きちんと見た彼女は、本当に美しかったからだ。

何だか訳の分からない気持ちの高ぶりを感じたが、恋などとは無縁だったこの頃の僕にとって、これが一目惚れなのだと気付くはずはなかった。

「どうしたの？私の顔に、何か付いているのかしら？」

僕の気持ちとは裏腹に、彼女は相変わらず抑揚のない口調で尋ねてきた。

知らぬ間に見蕩れていたらしい。

気恥ずかしさもあってか、僕は何でもないと行って顔を背けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9508j/>

恋愛スターダスト

2010年10月20日19時58分発行